

#### (6) 精神科・心療内科以外の診療科への通院の有無

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児の精神科・心療内科以外の診療科への通院の有無の状況は、「有り」が 528 名で全体の 18.2%であり、2 割弱程度の通院があった。

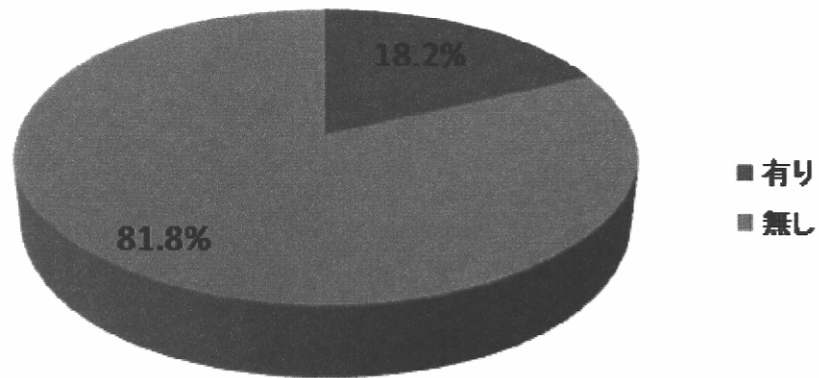


図 7-36 精神科・心療内科以外の診療科への通院の有無 n=2,898

#### (7) 精神科・心療内科以外の診療科での投薬の有無

全国調査で対象となった乳幼児のうち、欠損値を除く乳幼児の精神科・心療内科以外の診療科での投薬の有無の状況は、「有り」が 317 名で全体の 11.0%であった。

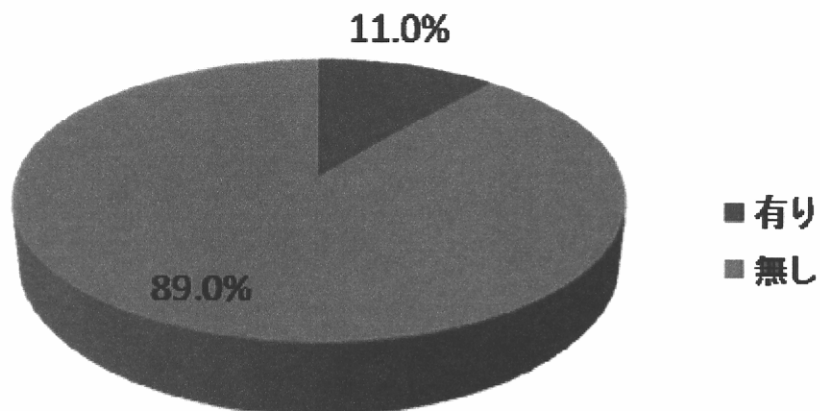


図 7-37 精神科・心療内科以外の診療科での投薬の有無 n=2,883

#### (8) 施設における心理療法の実施の有無

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児の施設における心理療法の実施の有無の状況は、「有り」が 365 名で全体の 12.7%であり、1 割を超える施設で、心理療法が実施されていることが確認できた。

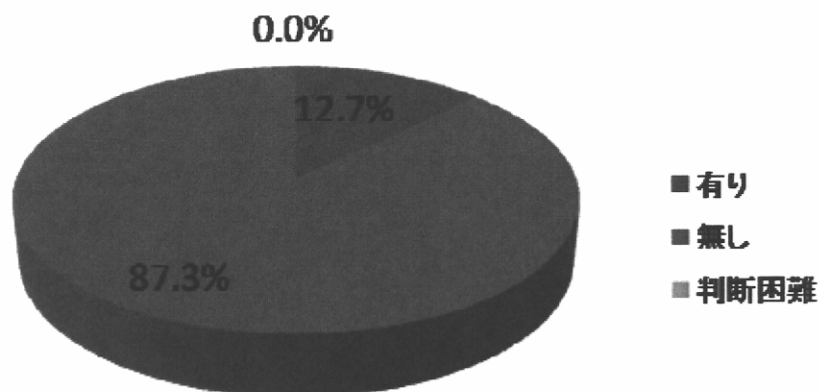


図 7-38 施設における心理療法の実施の有無 n=2,885

#### (9) 施設外における心理療法の実施の有無

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児の施設外における心理療法の実施の有無の状況は、「有り」が 34 名で全体のわずか 1.2%であった。心理療法は主に施設内で実施されていることが確認できた。

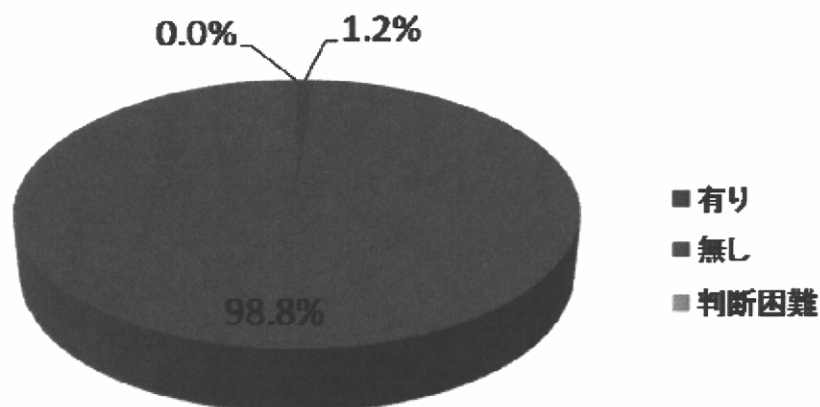


図 7-39 施設外における心理療法の実施の有無 n=2,883

### (10) 心理療法の必要性

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児の心理療法の必要性の状況は、「有り」が472名で全体の16.5%であった。前述した「心理療法の実施」の有無と比較すると、必要性がありながら心理療法が実施されていない乳幼児が存在することが示された。

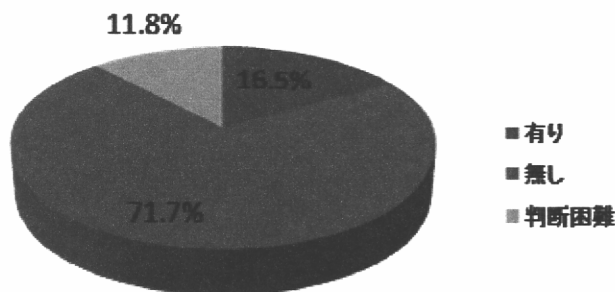


図 7-40 心理療法の必要性 n=2,861

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児の心理療法の必要性と施設内実施の有無の関係については、主観的な評価で心理療法の必要性が「有り」とされた乳幼児のうち、家族療法が「有り」である乳幼児は323名で全体の68.4%であるのに対して、「無し」である乳幼児も149名で31.6%であった。

表 7-118 心理療法の必要性と施設内実施の有無 n=2,857

		心理療法の必要性		
		有り	無し	判断困難
施設における心理療法の実施	有り	323	19	18
	無し	149	2032	316
		472	2051	334

表 7-119 心理療法の必要性と施設内実施の有無（割合）

		心理療法の必要性		
		有り	無し	判断困難
施設における心理療法の実施	有り	68.4%	0.9%	5.4%
	無し	31.6%	99.1%	94.6%
		100.0%	100.0%	100.0%

### (11) 被虐待体験の有無

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児の被虐待体験の有無の状況は、「有り」が34.7%であった。この結果から、少なくとも3名に1名の乳幼児が虐待を受けた体験があることがわかった。

また、乳幼児の虐待の状況は以下のとおりであった。虐待の状況については、最も多かったのが「ネグレクト」で24.9%であり、4名に1名程度の乳幼児が経験していた。続いて、「身体的虐待」が10.1%、「心理的虐待」が3.6%、「性的虐待」が0.1%（4名）であった。

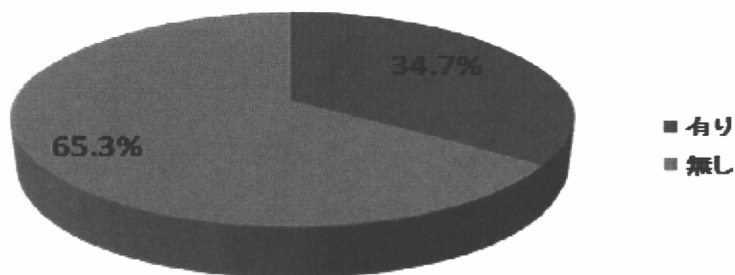


図 7-41 被虐待体験の有無 n=2,936

表 7-121 虐待の状況 n=2,936

	回答数	割合
ネグレクト	731	24.9%
身体的虐待	296	10.1%
心理的虐待	105	3.6%
性的虐待	4	0.1%
その他	62	2.1%
判断困難	25	0.9%

### (12) 家族療法の実施の有無

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児の家族療法の実施の有無の状況は、「有り」が183名で6.3%であった。

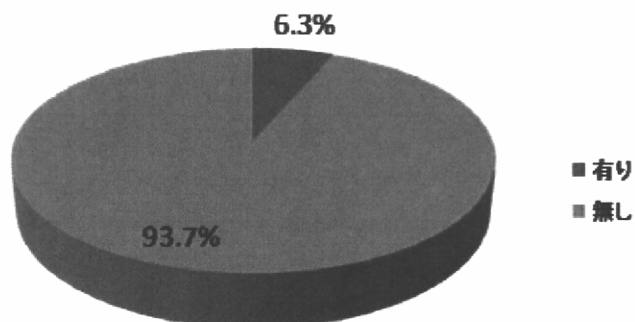


図 7-42 家族療法の実施の有無 n=2,910

### (13) 家族療法の必要性

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児の家族療法の必要性の状況は、「有り」が812名で27.8%であった。

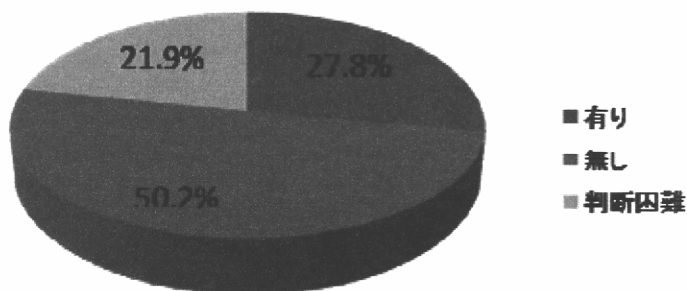


図 7-43 家族療法の必要性 n=2,916

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児の家族療法の必要性と実施の有無の関係において、主観的な評価で家族療法の必要性が「有り」とされた乳幼児のうち、家族療法が「有り」である乳幼児は177名で全体の22.0%であるのに対して、「無し」である乳幼児は628名で78.0%であった。

表 7-124 家族療法の必要性と実施の有無 n=2,900

		家族療法の必要性		
		有り	無し	判断困難
家族療法 の実施	有り	177	1	3
	無し	628	1463	628
		805	1464	631

表 7-125 家族療法の必要性と実施の有無（割合）

		家族療法の必要性		
		有り	無し	判断困難
家族療法 の実施	有り	22.0%	0.1%	0.5%
	無し	78.0%	99.9%	99.5%
		100.0%	100.0%	

## 5. 乳児院におけるケアの状況等について

### (1) 主たるケア形態

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児が入所している乳児院の主体ケア形態の状況は、主たるケア形態については、「大舎制・中舎制」が 82.3%、「小舎（ユニット）」が 13.0%、「小規模グループケア」が 3.7%、「その他」が 0.9%であった。

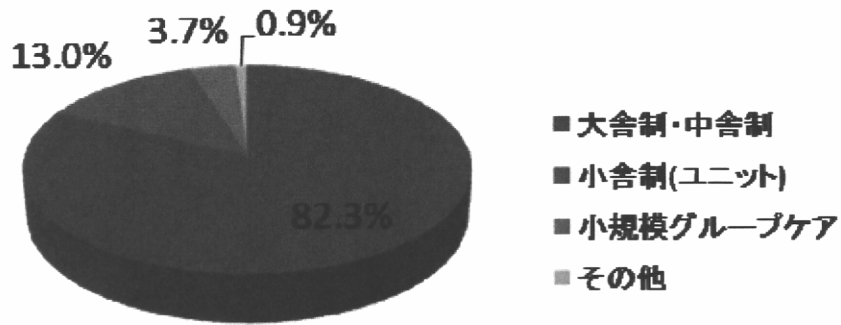


図 7-44 主たるケア形態 n=2,934

### (2) ケアの担当制

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児の入所している乳児院のケアの担当制は、主たるケア形態については、「単独」が 61.5%、「複数」が 27.8%、「チーム」が 10.7%であり、「単独」が 6 割を超えていることがわかった。

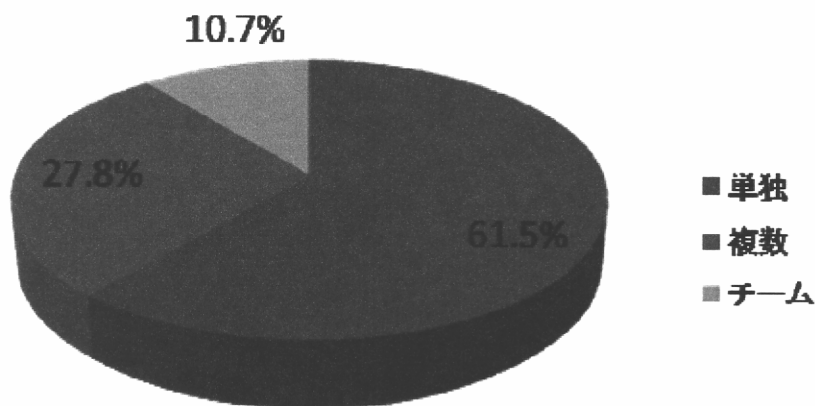


図 7-45 ケアの担当制 n=2,927

### (3) 勤務経験延べ年数

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児をケアしている職員の勤務経験延べ年数の平均値は 10.48 年であり、10 年を超えた。最小値は 0 年（1 年未満）であり最大値は 40 年であった。歪度は 1.10 で正であり、右に裾野がある分布となっていた。

平均	10.48
標準誤差	0.18
中央値 (メジアン)	7
最頻値 (モード)	3
標準偏差	9.91
分散	98.13
尖度	0.20
歪度	1.10
範囲	40
最小	0
最大	40
標本数	2903

#### (4) ケアの適合状況

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児のケアの適合状況は、「適している」が83.3%、「適していない」が16.7%であった。

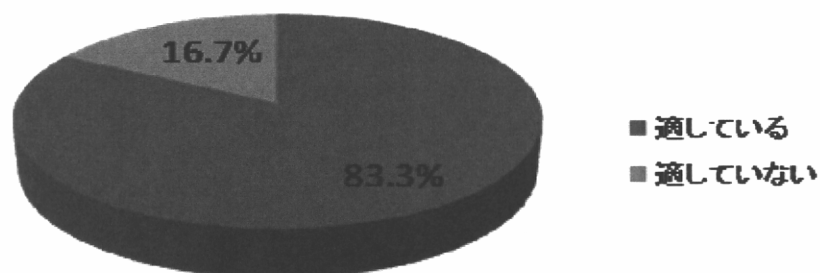


図 7-46 ケアの適合状況 n=2,903

#### (5) 適していると思われる他の施設

全国調査で対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児について「ケアの適合状況」で「適していない」とした乳幼児が適していると思われる他の施設は、「里親の家」が最も多く147名で27.0%であった。続いて「児童養護施設」が20.4%、「家庭」が13.9%、知的障害児施設が10.5%などとなった。

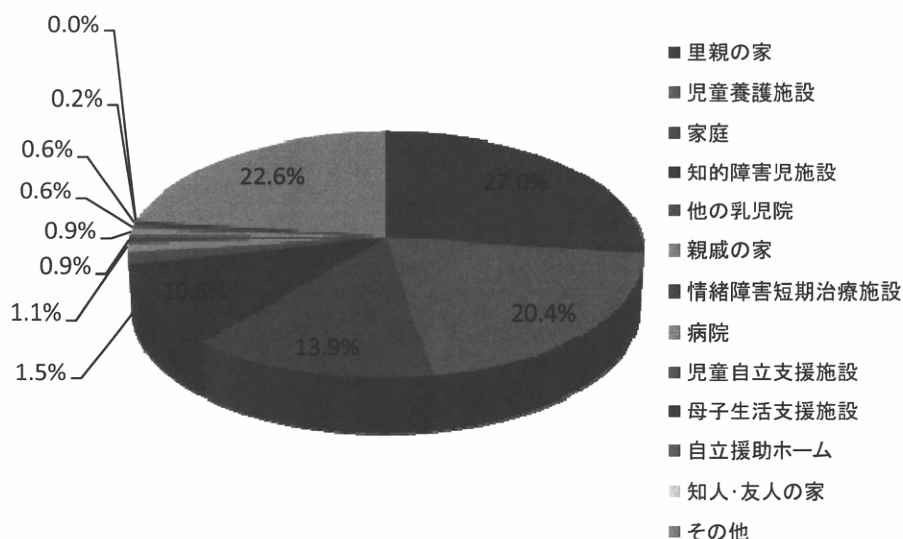


図 7-47 「適している」他の施設 n=545



(6) ケア負担感による分類

対象となった乳幼児のうち欠損値を除く乳幼児について、(主観的な) ケアの負担感は、(主観的な) ケアの負担感について、「変わらない」と回答した者は 57.4%、「やや重いケア負担」と回答した者は 30.5%、「かなり重いケア負担」と回答した者は 12.1%であった。

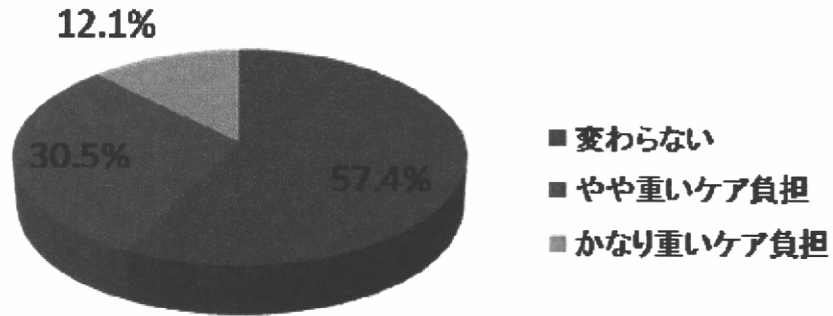


図 7-48 ケアの負担感 n=817

## 第8章 乳児院のケア実態に関するパイロット調査-入所乳幼児の状態（患者評価手法を用いて）の把握-

### 1.調査の目的および方法

乳児院において、既に診療報酬制度で患者の評価に用いられている「重症度・看護必要度」基準をアセスメント項目とする乳幼児の状態についての調査を実施した。

この調査の対象となった乳児院は、わが国でも、とくに医療的なケアを多く提供し、ケア量が多いとされた2つの施設である。この乳児院に入所していたすべての乳児が調査対象となった。

これらの乳児の評価は、入力システムを用い、2週間にわたって毎日、看護師によって入力された。調査対象は60名で、のべ671人日分の評価データが収集された。

この671名を患者分類法<sup>\*注1)</sup>を用いて乳児院の乳幼児を分類した結果、全体では、タイプ3が35名(5.2%)、タイプ4が209(31.1%)、タイプ5が427名(63.6%)でタイプ5が最も多かった。

### 2.乳幼児の基本属性

#### (1) 性別

男性が32名(53.3%)、女性が28名(46.7%)であった。男性のほうが多かった。

#### (2) 平均年齢

0.5歳で最小は0歳、最大で6歳までの年齢分布であった。0歳が最も割合が高く71.7%、次いで1歳が18.3%であった。

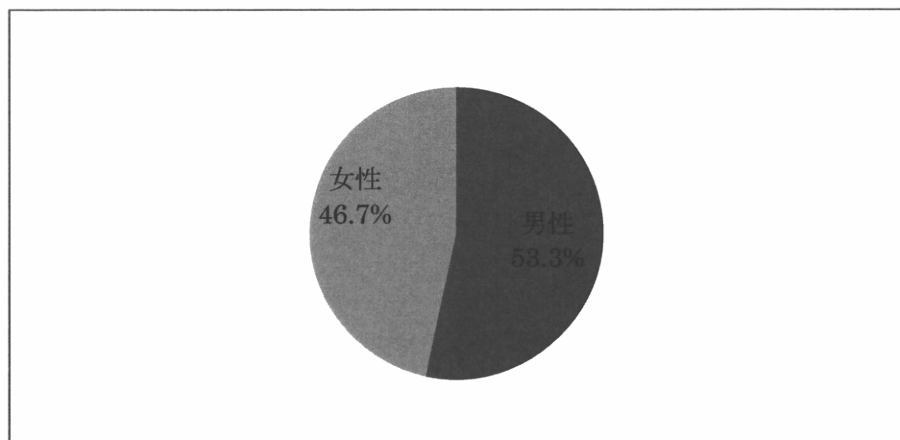


図8-1 性別

表8-1 平均年齢

平均値	標準偏差	最小値	最大値	N
0.5	1.2	0	6	60

表 8-2 年齢分布

年齢	N	%
0 歳	43	71.7
1 歳	11	18.3
2 歳	2	3.3
3 歳	1	1.7
4 歳	2	3.3
6 歳	1	1.7
合計	60	100

### 3.乳幼児の「重症度・看護必要度」基準による A 得点の特徴

「重症度・看護必要度」基準による A 得点は、医療処置の多さを明らかにする得点である。この A 得点は、平均値が 0.2 点でかなり低かった。施設別では N 乳児院で 0.1 点、O 乳児院では 0.4 点であり、どちらも 1 点に満たない状態であり、医療処理は少なかった。

表 8-3 「重症度・看護必要度」基準による A 得点（医療の処置）

A 得点	平均値	標準偏差	最小値	最大値	N
O 乳児院 0.	1	0.4	0	2	354
N 乳児院 0.	4	0.6	0	2	317
全体 0.	2	0.5	0	2	671

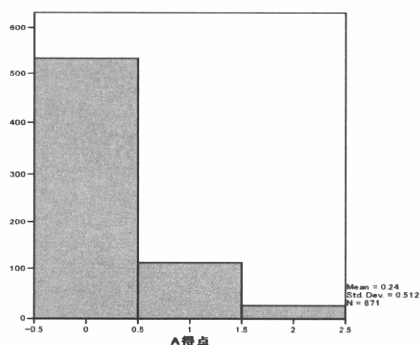


図 8-2 A 得点分布

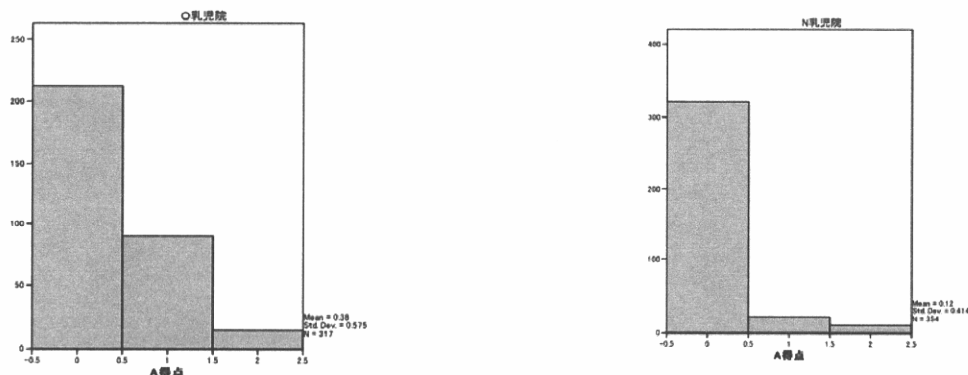


図 8-3 N 乳児院及び O 乳児院の A 得点の分布

#### 4.乳幼児の「重症度・看護必要度」基準における B 得点の特徴

B 得点は、日常生活の自立度を数量化したものであることから、0 歳の乳幼児においては、全体の平均値が 14.1 点で、N 乳児院で 14.0 点、O 乳児院では 14.3 点であり、どちらの施設でも極めて高い 14 点以上という得点が示されていた。

表 8-4 乳幼児の B 得点（日常生活の自立度）

B 得点	平均値	標準偏差	最小値	最大値	N
N 乳児院 14	.0	3.1	9	19	354
O 乳児院 14	.3	2.3	10	18	317
合計 14	.1	2.8	9	19	671

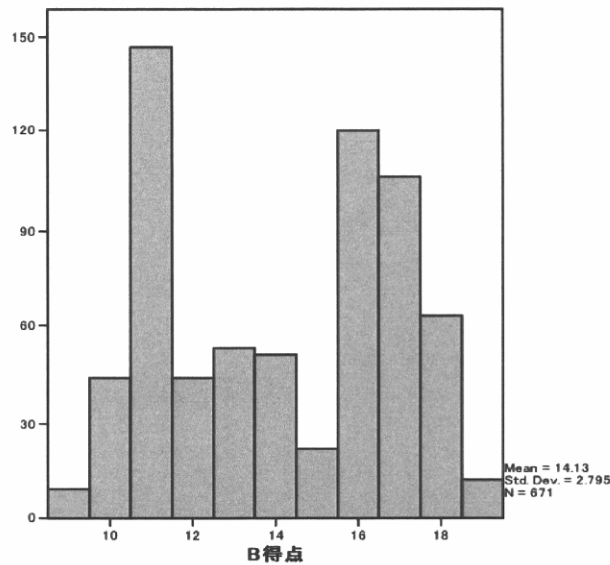


図 8-4 B 得点分布

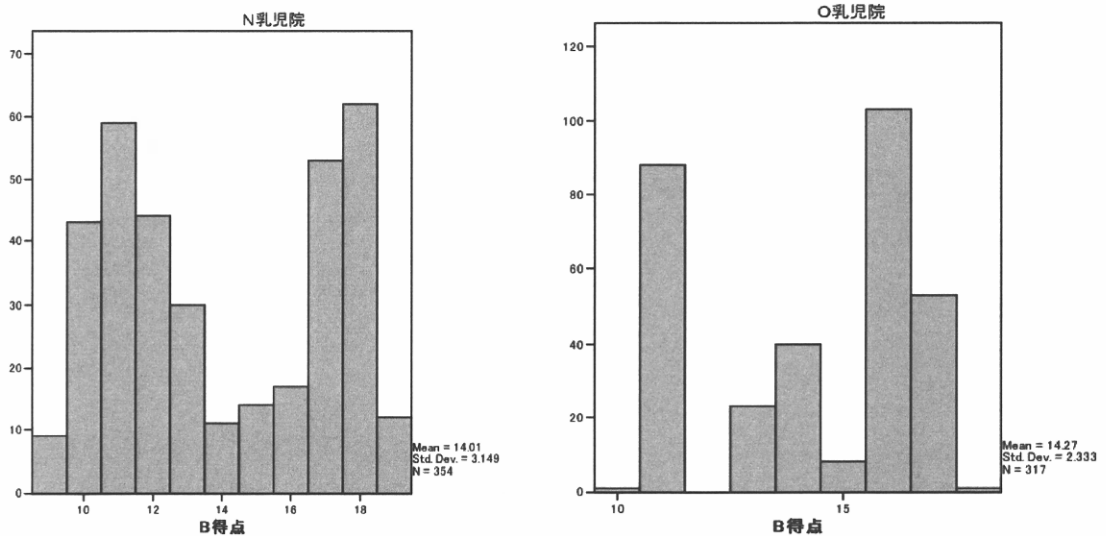


図 8-5 N 乳児院及び O 乳児院の B 得点の分布

### 5.患者分類による乳幼児の分類

N乳児院では、タイプ3が34名(9.6%)、タイプ4が121名(34.2%)、タイプ5が199名(56.2%)で、タイプ5が最も多かった。同様に、O乳児院では、タイプ3が1名(0.3%)、タイプ4が88(27.8%)、タイプ5が228名で(71.9%)の割合で存在し、O乳児院のほうがN乳児院よりも、タイプ5の割合は高かった。

両施設ともに特定集中治療室やハイケアユニットの患者と同様の状態像をもった乳幼児が9割以上、存在しており、多くのケアが必要であることが推察された。

表 8-5 乳児院別患者分類別構成人数

	タイプ3		タイプ4		タイプ5		合計	
	N	% N	% N	% N	% N		%	
N乳児院	34	9.6	121	34.2	199	56.2	354	100
O乳児院	1	0.3	88	27.8	228	71.9	317	100
全体	35	5.2	209	31.1	427	63.6	671	100

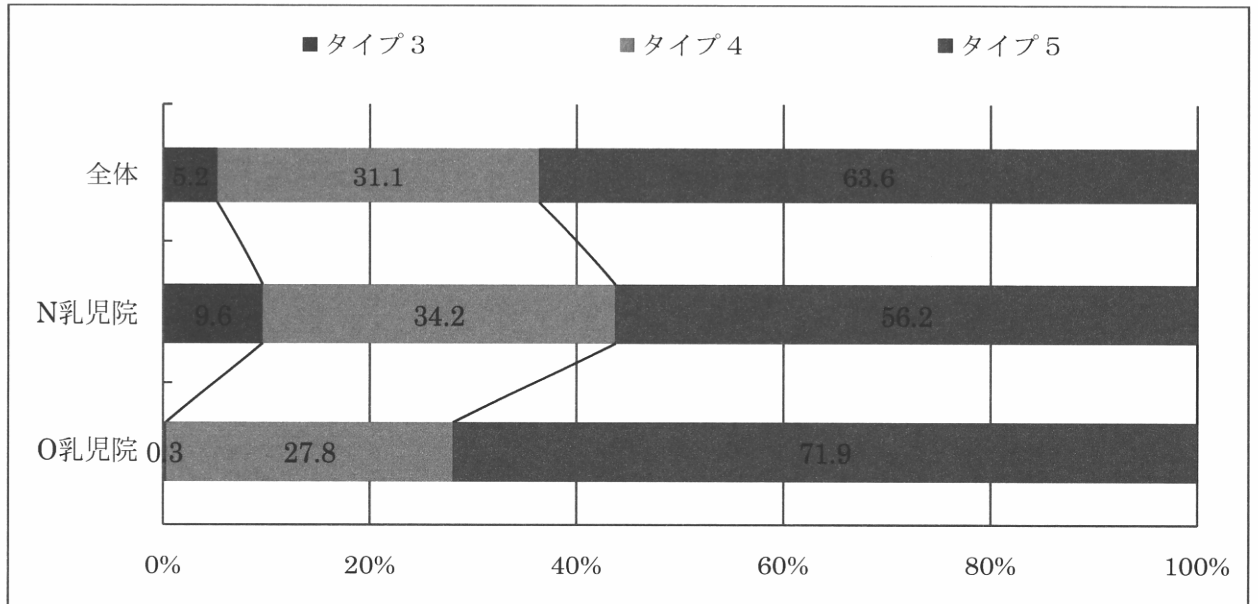


図 8-6 乳児院別患者分類別構成人数

注1) 患者分類

本調査対象に用いた患者分類は、すでに医療保険制度における診療報酬において、特定集中治療室 (ICU) やハイケアユニット (HCU) の入院管理料の算定の届け出に際して義務付けられる患者評価の得点表を利用した分類のことをいう。

患者分類は、ICUに相応しいの患者のスクリーニングをするための「重症度」基準とハイケアユニットに相応しいのスクリーニングをするため「重症度・看護必要度」基準の2つの指標を用いて、患者の状態像を簡便に把握し、分類するために開発された。

この分類は、以下のフローチャートに基づいて5つに分類される。

まず、「重症度」基準と「重症度・看護必要度」基準の両方を満たす患者を“タイプ5”，「重症度」基準を満たすが「重症度・看護必要度」基準を満たさない患者を“タイプ4”，ICU基準は満たさないがHCU基準を満たす患者を“タイプ3”，「重症度」基準と「重症度・看護必要度」基準のいずれも満たさない患者で、AまたはB得点のいずれかが1点以上の場合、“タイプ2”とし、それ以外のもっとも軽い状態像の患者を“タイプ1”としている。これまでの研究から、患者の重症度を示す段階としての臨床的に利用が進められており、タイプ5・4はICUレベル、レベル3がHCUレベル、レベル2・1を一般患者レベルとしている。

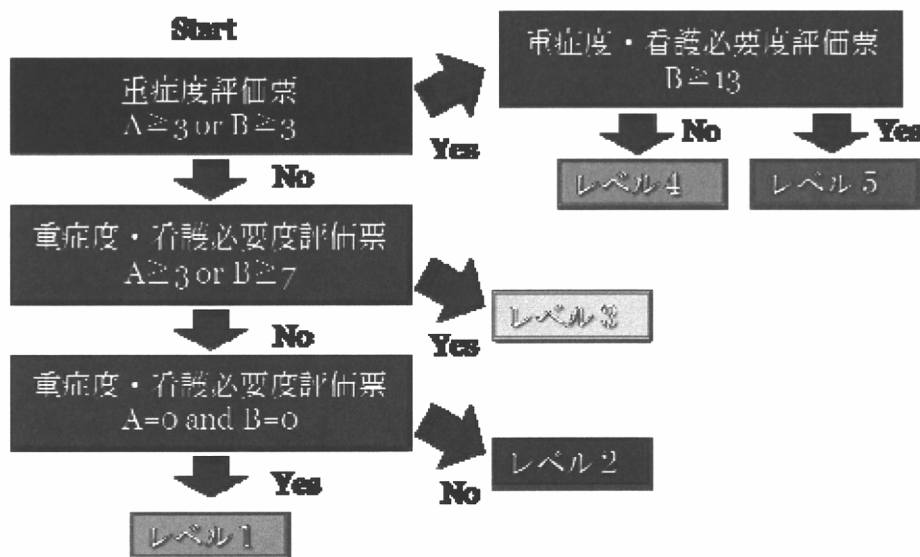


図 患者分類のフローチャート

上記のフローチャートを用いて、患者を1～5に分類する際の具体的なAおよびBの得点は以下の通りである。

まず、患者タイプ5は、「重症度・看護必要度」B得点13点以上、かつ「重症度」A得点3点以上、B得点が5点以下である。

患者タイプ4は、「重症度」でA得点3点以上、B得点が5点以下

患者タイプ3は、「重症度・看護必要度」でA得点3点以上またはB得点7点以上

患者タイプ2は、「重症度・看護必要度」でA得点1点以上またはB得点1点以上

患者タイプ1は上記以外の得点のものをいう。

すでに、急性期病棟の一般病棟においては、レベル2の割合が5割程度を占める病院が多いことがわかっている。(筒井孝子「診療報酬における「看護必要度」利用の意義と今後の課題」看護展望 2008;33(5):460.)

第9章 乳幼児の状態 - 「重症度・看護必要度」の評価項目における回答傾向-

1. 乳幼児に提供された医療的な処置（「重症度・看護必要度」A項目の評価結果）

①創傷処置

創傷処置について、全体では、「なし」が648名（96.6%）、「あり」が23名（3.4%）、タイプ3では、「なし」が35名（100%）、「あり」が0名（0%）、タイプ4では、「なし」が202名（96.7%）、「あり」が7名（3.3%）、タイプ5では、「なし」が411名（96.3%）、「あり」が16名（3.7%）であった。

いずれのタイプにおいても創傷処置は、ほとんど発生していなかった。

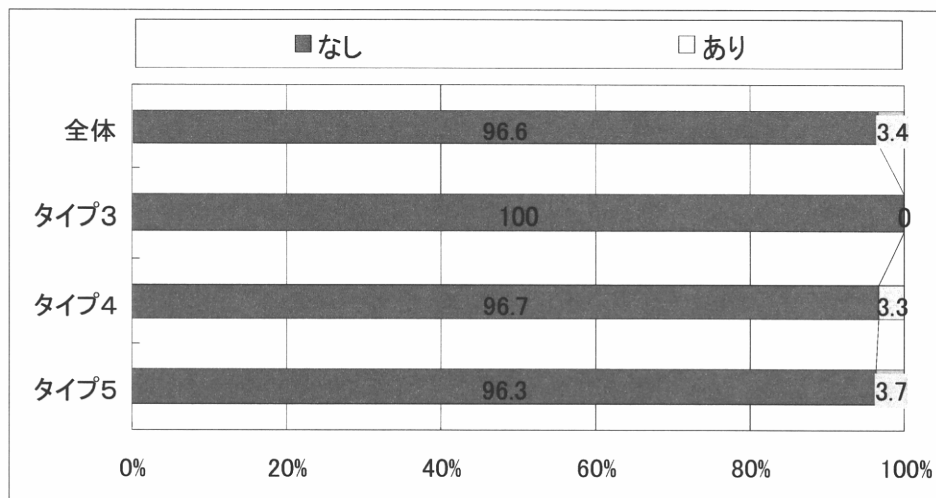


図9-1 創傷処置

②蘇生術の施行

蘇生術の施行について、全体では、「なし」が671名（100%）、タイプ3では、「なし」が35名（100%）、タイプ4では、「なし」が209名（100%）、タイプ5では、「なし」が427名（100%）で、すべてのタイプにおいて蘇生術は行われていなかった。

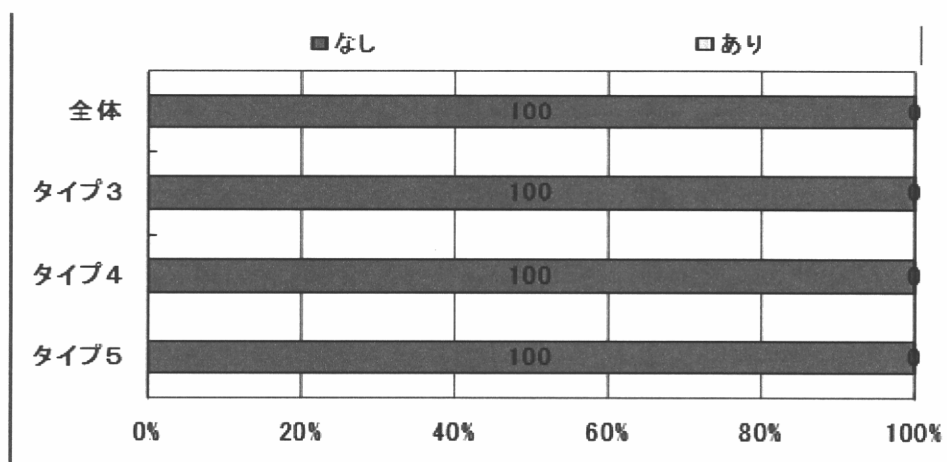


図9-2 蘇生術の施行

③ 血圧測定

全体では、「0回」が671名(100%)、タイプ3では、「0回」が35名(100%)、タイプ4では、「0回」が209名(100%)、タイプ5では、「0回」が427名(100%)で、血圧測定もまったく行われていなかった。

④ 時間尿測定

全体では、「なし」が642名(95.7%)、「あり」が29名(4.3%)、タイプ3では、「なし」が35名(100%)、「あり」が0名(0%)、タイプ4では、「なし」が208名(99.5%)、「あり」が1名(0.5%)、タイプ5では、「なし」が399名(93.4%)、「あり」が28名(6.6%)であった。タイプ4と5以外では、まったく時間尿測定は行われていなかった。

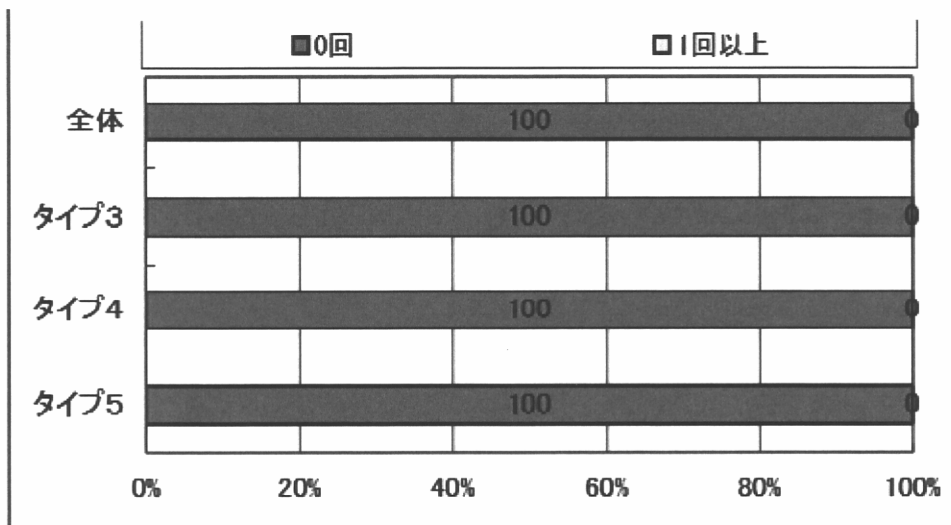


図 9-3 血圧測定、時間尿測定

④ 呼吸ケア

呼吸ケアについて、全体では、「なし」が561名(83.6%)、「あり」が110名(16.4%)、タイプ3では、「なし」が34名(97.1%)、「あり」が1名(2.9%)、タイプ4では、「なし」が174名(83.3%)、「あり」が35名(16.7%)、タイプ5では、「なし」が353名(82.7%)、「あり」が74名(17.3%)であった。呼吸ケアは、タイプ4と5に16%前後、行われていただけであった。

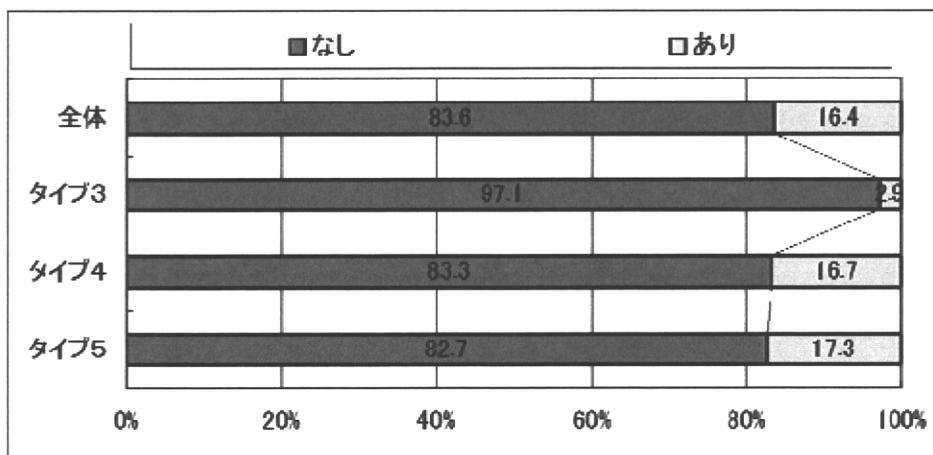


図 9-4 呼吸ケア



⑤ 点滴ライン同時3本以上

点滴ライン同時3本以上は、全体では、「なし」が670名(99.9%)、「あり」が1名(0.1%)、タイプ3では、「なし」が35名(100%)、「あり」が0名(0%)、タイプ4では、「なし」が208名(99.5%)、「あり」が1名(0.5%)、タイプ5では、「なし」が427名(100%)、「あり」が0名(0%)で、点滴ラインが3本以上と示されたのは、タイプ4の1名だけであった。

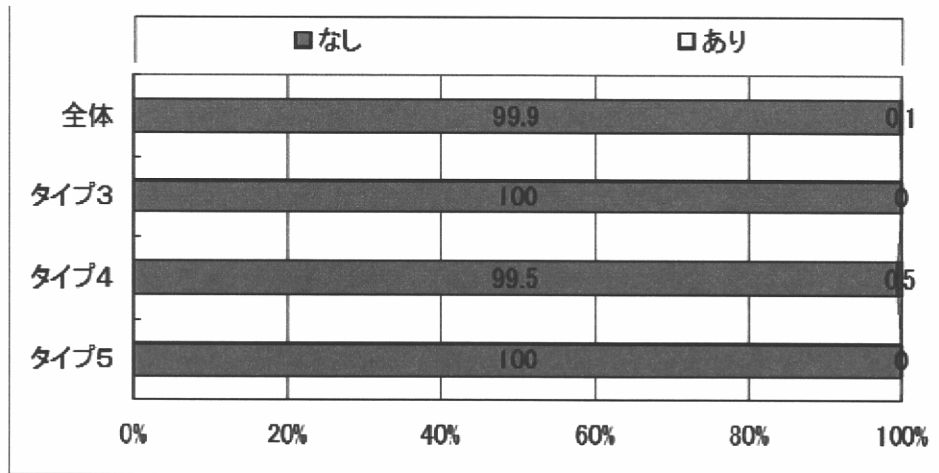


図9-5 点滴ライン同時3本以上

⑥ 心電図モニター

全体では、「なし」が671名(100%)、タイプ3に、「なし」が35名(100%)、タイプ4では、「なし」が209名(100%)、タイプ5では、「なし」が427名(100%)で、まったく心電図モニターはついていなかった。

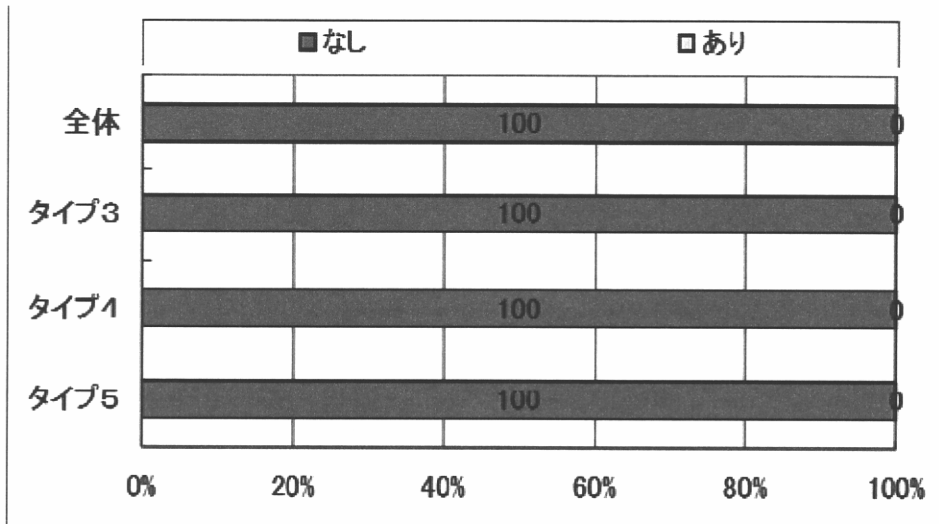


図9-6 心電図モニター

⑦ 輸液ポンプの使用

全体では、「なし」が 670 名 (99.9%)、「あり」が 1 名 (0.1%)、タイプ 3 では、「なし」が 35 名 (100%)、「あり」が 0 名 (0%)、タイプ 4 では、「なし」が 209 名 (100%)、「あり」が 0 名 (0%)、タイプ 5 では、「なし」が 426 名 (99.8%)、「あり」が 1 名 (0.2%)であった。タイプ 3 と 5 に輸液ポンプを使っているものがわずかにいるだけであった。

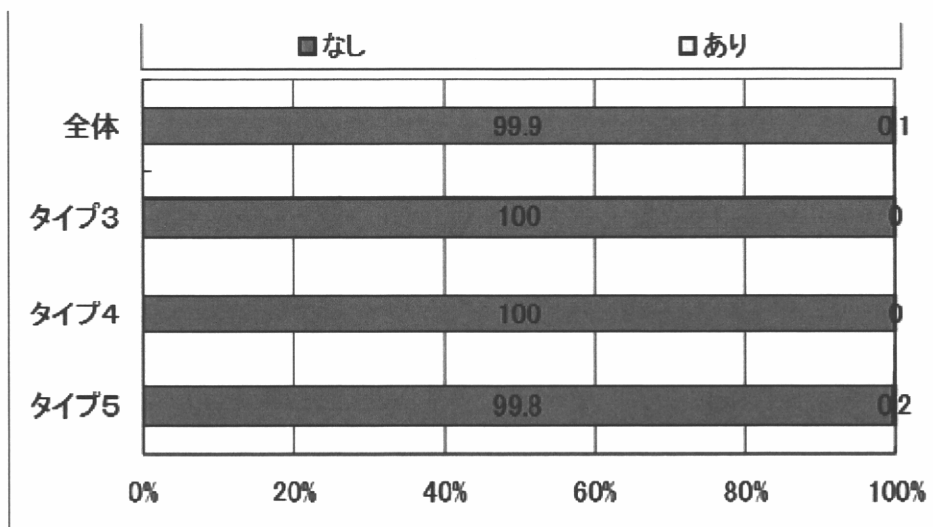


図 9-7 輸液ポンプの使用

⑧ 動脈圧測定

動脈圧測定について、全体では、「なし」が 671 名 (100%)、タイプ 3 では、「なし」が 35 名 (100%)、タイプ 4 では、「なし」が 209 名 (100%)、タイプ 5 では、「なし」が 427 名 (100%)であった。これは、すべての乳幼児に行われていなかった。

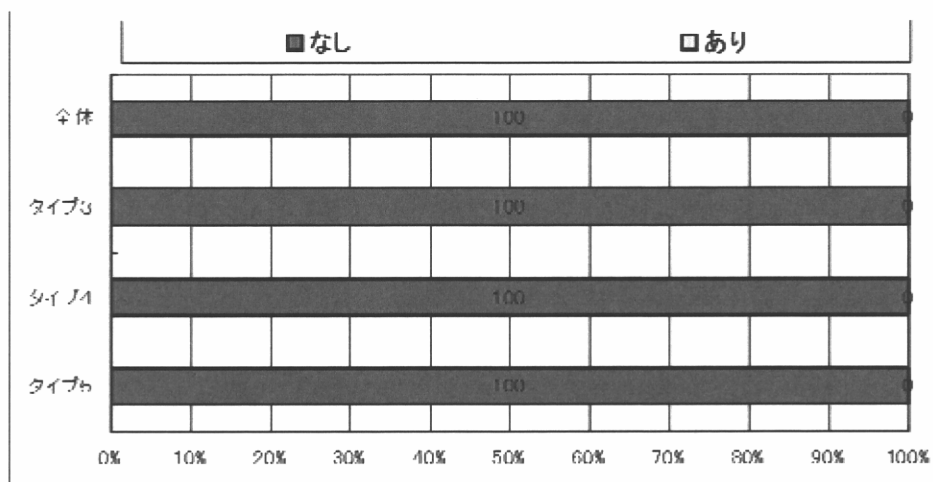


図 9-8 動脈圧測定

⑨ シリンジポンプの使用

シリンジポンプの使用について、全体では、「なし」が 671 名 (100%)、タイプ 3 では、「なし」が 35 名 (100%)、タイプ 4 では、「なし」が 209 名 (100%)、タイプ 5 では、「なし」が 427 名 (100%) ですべての乳幼児に行われていなかった。

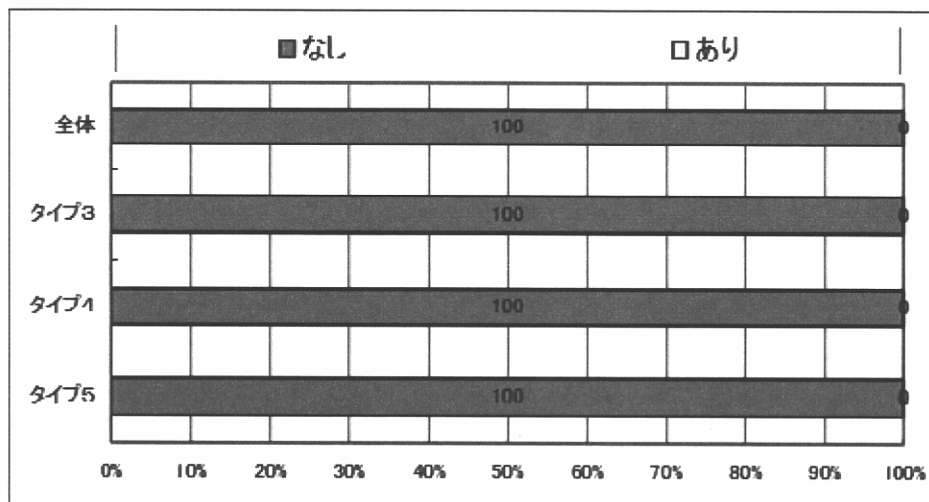


図 9-9 シリンジポンプの使用

⑩ 中心静脈圧測定

中心静脈圧測定について、全体では、「なし」が 671 名 (100%)、タイプ 3 では、「なし」が 35 名 (100%)、タイプ 4 では、「なし」が 209 名 (100%)、タイプ 5 では、「なし」が 427 名 (100%) で、すべての乳幼児に行われていなかった。

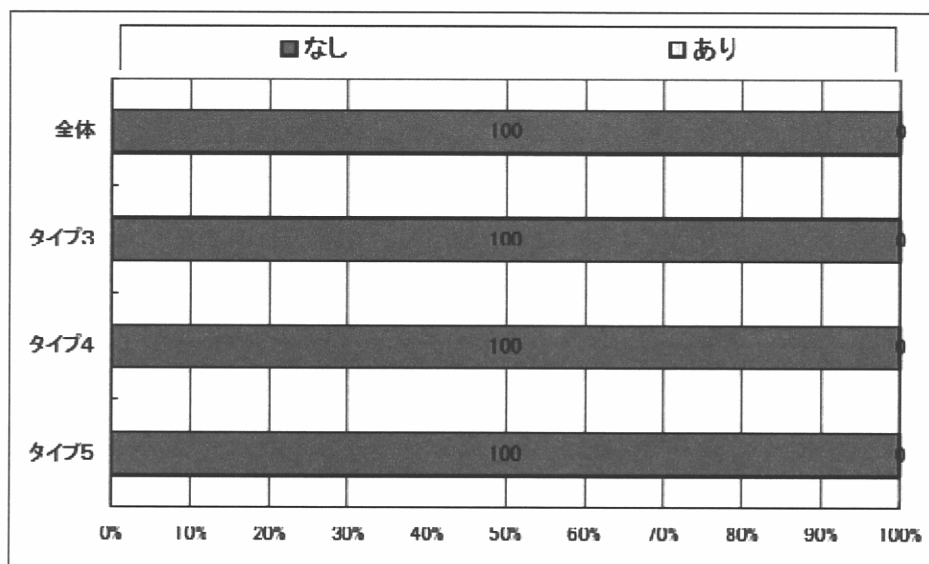


図 9-10 中心静脈圧測定

⑪ 人工呼吸器の装着

全体で、「なし」が 671 名 (100%)、タイプ 3 では、「なし」が 35 名 (100%)、タイプ 4 では、「なし」が 209 名 (100%)、タイプ 5 では、「なし」が 427 名 (100%) で、すべての乳幼児に行われていなかった。

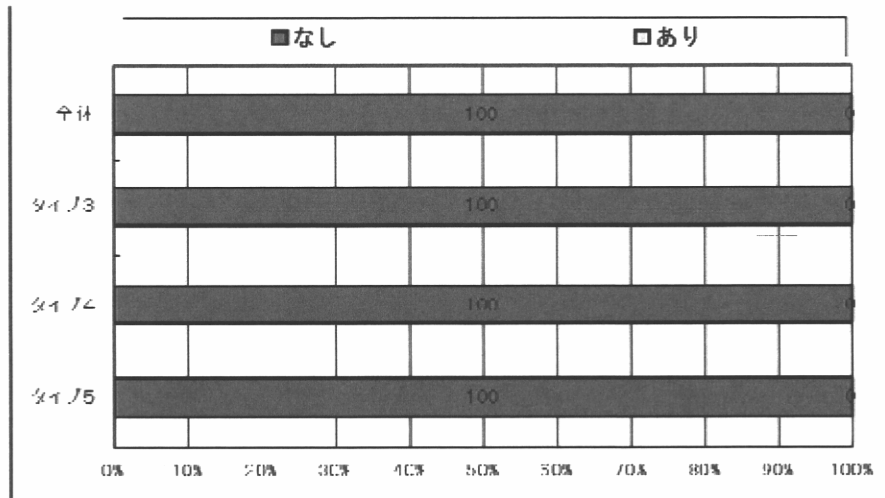


図 9-11 人工呼吸器の装着

⑫ 輸血又は血液製剤の使用

輸血又は血液製剤の使用について、全体では、「なし」が 671 名 (100%)、タイプ 3 では、「なし」が 35 名 (100%)、タイプ 4 では、「なし」が 209 名 (100%)、タイプ 5 では、「なし」が 427 名 (100%) で、すべての乳幼児に行われていなかった。

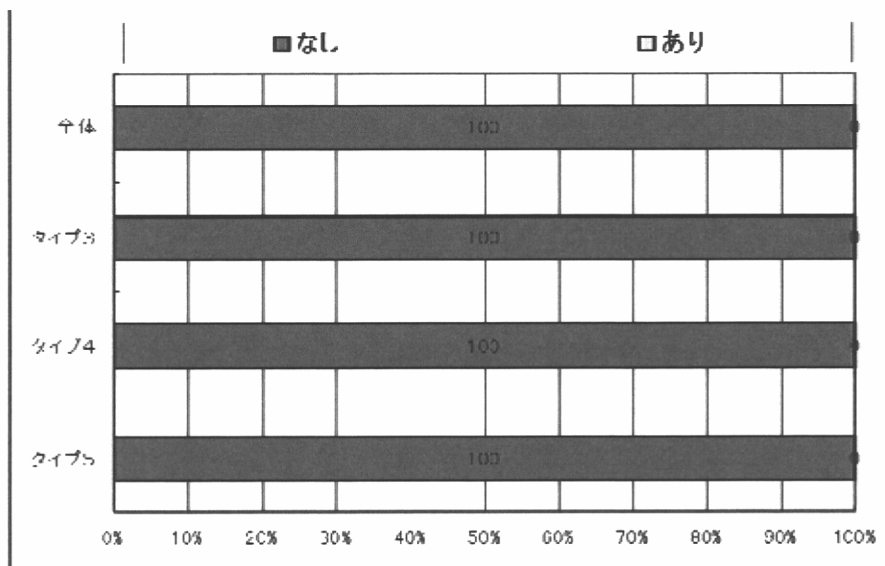


図 9-12 輸血又は血液製剤の使用